2010 年 11 月 30 日 ISSN 0916-9237

アメリカ学会会報

－The American Studies Newsletter－

No.174 November 2010

酒とタバコにまつわる不平等な法律

岡　本　　勝

今から 100 年ほど前に，アメリカでは酒類の製造や販売などを禁止する法律を求めた運動が活発化し，修正第 18 条が合衆国憲法へ書き加えられるにいたったことは，アメリカ史に関心をもつ者には広く知られている。しかし，ほぼ同じ時期に，紙巻きタバコの販売を中心に，一部には製造や広告なども禁止する法律を求めた運動が行われ，実際にいくつかの州でそのような法律が成立したことは，アメリカ人の間でもあまり知られていない。

この運動で標的にされた紙巻きタバコは，南北戦争後に商品化された比較的新しい形態だったこともあり，19 世紀末の時点ではあまり使用されていなかった。例えば 1880 年には，全葉タバコのうち噛みタバコへは 58 パーセント，パイプタバコと葉巻へは 19 パーセント，嗅ぎタバコへは 3 パーセントが加工されていたが，紙巻きタバコへはわずか 1 パーセントだった。使用者が少なく「棺の釘」とか「悪魔の爪楊枝」などと呼ばれることもあったこの形態のタバコが，反タバコ派によって標的にされたのは，それが女性の間で流行しはじめていたことが大きな原因であった。

19 世紀後半のいわゆる「ヴィクトリア時代の道徳観」によると，女性には「純真，健康，清潔，そして禁欲」を尊ぶ人格が求められ，タバコ使用は飲酒と同様に戒められた。彼女たちが好んだ紙巻きタバコは，他の「伝統的な形態」のタバコを嗜んでいた男性によって「女々しいタバコ」と呼ばれ，敬遠される傾向にあった。そのような事情を背景に行われた反紙巻きタバコ運動は，この形態のみを標的にして販売などを禁止する州法の成立を目指したのである。その結果，1893 年のワシントン州を皮切りに，インディアナ，イリノイ，テネシー，ミネソタなど 14 州と 1 准州でその成立と廃止が繰り返され，カンザス州で 1927 年に廃止されたものが最後になった。

この紙巻きタバコ販売等禁止法と修正第 18 条に共通して見られたのは，秩序の構築を目指して特定の社会集団を統制しようとする側面であった。20 世紀への転換期に禁酒法運動の中心にいたのは産業資本家であり，彼らは生産効率低下の一因を労働者による過度の飲酒に求め，その抑制を運動の目的の一つに掲げた。密造や密輸によって出回った割高の酒を飲み続けることができた資本家と，高額になった禁制品に手が届かなくなった労働者の間には明らかに不平等が存在し，そこから生じる不満が修正第 18 条の廃止（1933 年）の背景としてあったことは明白だ。

先ほど説明したように，紙巻きタバコ販売等禁止法もまた女性という集団を対象にした社会統制の手段という側面をもっていた。したがって，第一次世界大戦時の堅苦しい雰囲気から解放され，男女平等を求める風潮が強くなった 1920 年代に，この立法を目指す運動が弱体化していったことは自然の成り行きであった。そもそも社会を支配する集団が別の集団を差別や統制しようとする動きは，世界中で繰り返されてきたが，アメリカもその例外ではなかったのである。

以上述べた法律はひと昔前のものだったが，最近タバコに関連して，差別や統制を論じるものが散見されるようになっている。確かに，20 世紀後半に活発化し，21 世紀の今も続いている「反喫煙運動」では，喫煙者だけではなく非喫煙者の健康被害が医学的・科学的に議論されており，現在求められている法律も禁煙区域の拡大であって，タバコの製造や販売などの禁止ではない。それでも，喫煙率に関して白人よりもアフリカ系が，また高学歴者よりも低学歴者の方がそれぞれ高く，さらには男性が下がる一方で女性が微増しているという調査結果に言及しながら，雇用や保険などで喫煙者が不平等に扱われている状況を危惧する者がいる。そして，その人物が必ずしもタバコ業界の関係者だけではないことも興味深い。

（広島大学）

『アメリカ研究』第 46 号原稿募集

『アメリカ研究』（年報）は，2012 年 3 月に第 46 号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿を期待します。

1. 内　　容　アメリカ研究に関する未発表論文，もしくは進行中の研究ノート。前年度に『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文・研究ノートが掲載された方は，本年度の投稿をご遠慮ください。また，同じ年度に『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することは出来ません。これは，なるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚　　数　論文は 33 行×34 行のレイアウトで 19 ページ以内（註を含む）。研究ノートは同形式で 8 ページ以内。ほかに英文レジュメ（500 語）。執筆要項は，学会ウェブサイト（http://www.jaas.gr.jp）を参照のこと。
3. 原稿締め切り期日　2011 年 9 月 6 日（火）。学会事務局に必着のこと。
4. 提　出　部　数　3 部（コピー）。提出原稿は不採用の場合もお返し致しません。

応募者は，論文題目に簡単な説明を付けて，2011 年 6 月末日までに電子メール（office@jaas.gr.jp）で，年報編集委員会宛てにお申し込みください。採否は編集委員会の責任において審査決定致します。

『アメリカ研究』第 46 号「特集論文」募集のお知らせ

会報 173 号にてお知らせしました通り，『アメリカ研究』第 46 号の特集テーマは，「海と国家」と決まりました。

「特集」に執筆希望の会員は，2011 年 6 月末日までに，氏名・所属，論文題目および構想・資料などの説明（400 字程度）を電子メール（office@jaas.gr.jp）で，年報編集委員会宛てにお申し込みください。その際の件名は，「『アメリカ研究』特集応募」と明記してくださるようお願いいたします。原稿については，学会ウェブサイト（http://www.jaas.gr.jp）上の執筆要項をご覧ください。締め切りは，9 月 6 日（火）必着です。

『英文ジャーナル』第 23 号原稿募集のお知らせ
The Japanese Journal of American Studies—Call for Papers

JAAS members are invited to submit proposals for papers to be included in the 23rd issue (June 2012) of the *Japanese Journal of American Studies*. Papers on any topic within the field of American Studies, including those related to this issue's special theme, "Race and Ethnicity," are welcome.

This issue will explore the theme of "Race and Ethnicity" from a wide range of disciplinary perspectives. In general, we welcome papers that shed light on aspects of American ways of life, society, history, literature, politics, economics, law, space, art and architecture, and uses of electronic communications media.

Proposals, consisting of a title and abstract (approximately 300 words), are due by January 26, 2011, and should be sent to the JAAS Editorial Committee, JAAS, c/o Center for Pacific and American Studies, University of Tokyo, 3-8-1 Komaba, Meguro-ku, Tokyo 153-8902. Completed manuscripts will be due May 9, 2011 (maximum 8000 words, including notes). Papers must be written in English, based on original research, and previously unpublished. Authors may submit only one proposal per issue. The JJAS style sheet can be obtained from the JAAS homepage (http: //www.jaas.gr.jp/english/).

Juro Otsuka, Editor-in-Chief, *The Japanese Journal of American Studies*

アメリカ学会清水博賞第 16 回公募のお知らせ

故清水博会員およびご遺族からの寄付金を基金として，「アメリカ学会清水博賞」が 1996 年度から設けられております。同賞は，若手会員による最初の単著として刊行された研究書のなかから特に優れた作品を毎年 1 点ないし 2 点程度選び，賞状と賞金 5 万円を贈るものです。

次回の審査に向けて会員諸氏のご協力をお願いいたします。当該期間（2010 年 1 月 1 日～2010 年 12 月 31 日）に刊行された著書で，該当する研究書にお気づきの会員（自薦も可）は，2011 年 1 月 10 日までに件名「2010 清水博賞候補推薦」にて事務局（office@jaas.gr.jp）宛にお知らせください。

清水博賞選考委員会

2010 年 ASA 年次大会のアメリカ大使館賞受賞者および在米 JAAS 大学院生のための奨学金受賞者のお知らせ

2010 年 11 月にテキサス州サン・アントニオで開催される ASA 年次大会のアメリカ大使館賞の受賞者は，今井祥子さん（東京大学大学院博士課程）に決まりました。

また，在米 JAAS 大学院生のための奨学金受賞者は以下のように決まりました。

竹内愛子　（ブラウン大学）　加藤恵理　（イェール大学）　有光道生　（ハーバード大学）
野村奈央　（テンプル大学）　中谷早苗　（ハワイ大学）

国際委員会

2011 年度　第 5 回名古屋アメリカ研究夏期セミナー（NASSS 2007–2011）参加のお勧め

南山大学において第 5 回名古屋アメリカ研究夏期セミナー（NASSS）を 2011 年 7 月 23 日（土）〜7 月 26 日（火），4 日間の日程で開催いたします。

I.　2011 年年次テーマ：「グローバル化とアメリカ研究の行方」（“American Studies in the Global Age”）
部門：【政治・国際関係】 部門，【歴史・社会】 部門，【文学・文化】 部門
基調講演者・米国人特別講師：
【政治・国際関係】 部門　—　Dr. Jeremi Suri（University of Wisconsin-Madison）
【歴史・社会】 部門　—　Dr. Paul A. Kramer（Vanderbilt University）
【文学・文化】 部門　—　Dr. Anita Patterson（Boston University）

II.　日程：
専門家会議 （会場：南山大学名古屋キャンパス）
7 月 23 日（土）　全体会：3 名の米国人招聘研究者による基調講演と日本人コメンテーターの論評をふまえた全体討論（同時通訳付）
7 月 24 日（日）　部門別会議：3 部門に分かれ，それぞれの会場で若手日本人研究者による報告をもとにした討論
国際大学院生セミナー （会場：南山学園研修センター）
7 月 25 日（月）　全体会：ワークショップ「研究者として成功するためには」，参加院生による自己紹介など
7 月 26 日（火）　部門別セミナー：3 部門に分かれての大学院生による研究発表
*セミナーは専門家会議・全体会を除き，すべて英語で行われます。

III.　参加条件：
【専門家会議】 大学教員・研究者，中学，高校教員であること
【国際大学院生セミナー】 ①原則として修士課程 2 年次以上の大学院生であること②7/23 の夜から 4 泊 5 日で南山学園研修センターにて宿泊可能であること③専門家会議への参加が可能であること
NASSS 2011 専門家会議および大学院生セミナーの詳細および募集要項は，2011 年 1 月中旬までに下記の南山大学アメリカ研究センター Web サイトに掲載されます。参加ご希望の方は，そこから申し込み用紙をダウンロードし，用紙ご記入後，NASSS 事務局宛てに送付下さい（電子メール可）。
ご不明な点，ご質問などございましたら下記までお問合せ下さい。皆さまのご参加をお待ちしております。

南山大学アメリカ研究センター　NASSS 事務局
〒466–8673 名古屋市昭和区山里町 18　TEL: 052–832–3111（内線：3426）FAX:（052）831–2741
Mail: nasss-jimu@nanzan-u.ac.jp　Web: http: //www.nanzan-u.ac.jp/AMERICA/index.html

アメリカ大使館賞の募集―日本で学ぶ大学院生対象の旅費援助奨学金―

アメリカ合衆国大使館からの特別基金提供による旅費援助奨学金の募集を行います。ヒューストンで開催される OAH（Organization of American Historians）の年次大会に 1 名の大学院生を日本から派遣します。

期間：2011 年 3 月 17 日–3 月 20 日
場所：テキサス州ヒューストン／ヒルトン・アメリカス–ヒューストン・ホテル
OAH ホームページ参照：　http://annualmeeting.oah.org/
奨学金の金額：1,500 ドル
応募資格：
1. アメリカ学会の会員であること。
2. 日本の大学の大学院博士課程に在籍し，専任職に就いていないこと。
3. OAH 大会の開催時に日本からの旅費を要すること。
4. 日本国籍あるいは日本永住権を有すること。
5. 渡米時に 45 歳未満であること。

審査結果：2011 年 1 月末日までに，学会 HP 上で公表する予定です。

応募を希望される方は，以下の書類を 2010 年 12 月 25 日から 2011 年 1 月 14 日までの期間に，アメリカ学会事務局 office@jaas.gr.jp に e-mail で送ってください。なお，事務局での混乱を避けるため，応募メールの件名は「OAH 大使館賞応募（2011）」と必ず明記してください。

1. 履歴書
2. 出版業績リスト（ある方のみ）。
3. 過去の ASA と OAH 年次大会への参加記録（ある方のみ）。それぞれについて参加年，大使館賞受賞経験の有無，口頭発表経験の有無を明記すること。
4. アメリカ大使館が別に助成している日米協会の「米国研究助成プログラム」奨学金の受給記録（ある方のみ）。
5. アメリカ研究へのあなたの関心と博士論文のための研究計画（英語で 500–600 語）。
6. 今回の OAH 年次大会で口頭発表を予定している方は，そのペーパーのタイトルと簡略な要旨。

国際委員会

新　刊　紹　介

森　孝一・村田晃嗣 編著
『アメリカのグローバル戦略とイスラーム世界』

（明石書店，2009 年，4,515 円）

本書は，2003-07 年度の同志社大学 COE プログラム「一神教の学際的研究――文明の共存と安全保障の観点から」の成果の一部であり，ジョージ・W・ブッシュ政権の 8 年間をその最末期の時点から俯瞰した上で，ブッシュ後のアメリカの行方をも展望しようとする試みである。これまでブッシュ政権は，同時多発テロという未曾有の事件の衝撃の下で，情動的あるいは近視眼的に，国際的な規範やアメリカの伝統に反する一連の政策を打ち出した，いわば異形の政権と捉えられる傾向にあった。本書は，ともすれば批判や糾弾に流れがちであったこれらの分析とは明確に一線を画す分析を提供する。

本書の中心を占める論考部分は，ブッシュ政権の政治基盤となった福音派と所謂「ネオコン」の来歴と変容を分析した第 1 部，対テロ戦争やブッシュ・ドクトリンなど同政権の対外政策を分析する第 2 部，そして同政権が攻撃の標的としたイスラーム主義の思想と運動を考察する第 3 部よりなり，巻末には 2007 年に同志社大学一神教学際研究センターで開催されたシンポジウムの記録が収録されている。執筆者には，政治学や宗教学のアカデミックな研究者のほかにジャーナリストも含まれ，そのうちシンポジウムの基調講演者であるフランシス・フクヤマを含む 6 名が外国人だ。このように多様な視点が提示されていることが，本書の大きな特徴である。

しかし同時に，本書の諸論考は，中長期的な文脈の中にブッシュ政権期を位置づける歴史的な視点に立脚する点で共通している。歴史的な視点に立つことで，同時多発テロで頂点を迎えた反米イスラーム主義の動向を含め，ブッシュ政権期に生起した様々な事態が，それ以前に源流を持つ様々な潮流のひとつの帰結であったことが明らかにされている。ブッシュ政権は，異常事態の下に出現した異形の政権としてではなく，様々な潮流の結節点として浮かび上がる。一方で，本書の執筆者たちは，ブッシュ政権期の様々な動きを不可避のものと捉えているわけではない。むしろ，ほぼ全ての執筆者たちは，ブッシュ政権に批判的な立場をとり，運命論的な「文明の衝突」論を排する視点を共有している。現状を歴史的に位置づけつつ「文明の共存」に向けた新たな経路を模索するという問題意識が，本書を貫流しているのである。

読者は，本書の複数の論考を重ね合わせ，あるいは対話させることで，多面的なブッシュ政権像を構築することが出来るであろう。例えば，フクヤマのアメリカ外交批判と中東・イスラーム世界からの寄稿者によるアメリカ外交批判を重ね合わせて考察するような，知的な冒険を試みることも可能である。本書から得られる知見は，将来行われるであろう一次史料に基づく実証的研究の代替物とはなりえぬにせよ，アメリカの現状を歴史的に位置づける一助となろう。それはまた，やや上滑りの観があるオバマ政権の「チェンジ」への期待を相対化するのにも役立つはずである。　　小野沢　透（京都大学）

有賀　貞 著
『国際関係史――16 世紀から 1945 年まで』

（東京大学出版会，2010 年，3,600 円）

本書は，16 世紀から第二次世界大戦終結に至る長い期間の国際関係の歴史を概説した大著である。そこでの基本的な問題関心は，いかにして現代の世界が形作られてきたのか，歴史的に跡付けることにより，これからの平和的な国際関係の追求，とくに日本の進むべき道の思考に役立てようとすることにあると思われるが，その叙述にはいくつかの重要な特色がみられる。

国際関係史の叙述は一般に国際政治史的性格が強く，本書も現実の政治過程の検討が中心となってはいるが，各章の冒頭でその時期の国際関係のあり方や構造の特徴を極めて的確に概括しており，それにより全体を通して国際関係の変遷の大筋を把握することができる。さらに各時期の国際関係の理解に必要な諸概念について適宜十分な説明がなされていることも，政治過程の分析をいっそう深みのある議論にするのに役立っている。

また著者が「はしがき」で言及しているように，とかく西洋中心になりがちな国際関係史の中で日本や東アジアをめぐる国際関係の比重を大きく組み込もうとした点も注目されてよい。これは上記の問題意識からして当然ともいえるが，その結果本書は広く国際関係の視点から日本の近代史を再考する格好の機会を提供してくれる。同様に重視してよいのは，国際関係史におけるアメリカ合衆国に関する考察であろう。著者が地域的にはアメリカ専攻であることを鑑みれば，とくに近代世界史の展開におけるアメリカの分析が鋭い洞察力をもってなされることが期待されるが，この点著者の持ち味が遺憾なく発揮されており，アメリカ外交史とは視座を異にした国際関係の立場からアメリカの対外関係や国際的役割を吟味するうえで，特別に示唆に富む内容のものとなっている。ここで本書はヨーロッパ諸列強の重要性に変わりはないにせよ，地域的にもよくバランスの取れた国際関係論という成果を生みだしている。

以上まず若干の特色と考える点を指摘したが，本書の構成に目を向けると，16 世紀から 18 世紀後半までは第 I 章「ヨーロッパの勢力拡張期の世界」として，密度の濃い集約的な議論で近代国際間係史の起点を説明し，続く 2 つの章で「大西洋圏の諸革命」から「イギリスの経済的優越」に至る時期に関し，変動過程の動因を明確に把握しながら概括的に吟味する。そして第 IV～V 章の本書の主要部分にあたる「帝国主義の時代」から「第二次世界大戦」に至る繰り返し大戦の破局に突入する激動の時期について，とくにアメリカの新たな国際的役割や日本の歩んだ道の国際的脈絡などを十分に視野に入れて文字通り詳細に検討を行なう。また全体を通して中見出を設定した叙述も内容を非常に解りやすくしている。

最後に本書の「終章」では，第二次世界大戦の歴史的意義を検討するとともに，「冷戦」を軸にした戦後の動向について評価と批判の交錯した議論がなされている。もとより戦後の国際関係史は本書の課題ではないが，この短い締め括りの中に，著者の含蓄のある平和志向の国際認識と期待感が端的に示されており，極めて味わい深いまとめとなっている。

新川健三郎（東京大学名誉教授）

金井光太朗 編著

『アメリカの愛国心とアイデンティティ――自由の国の記憶・ジェンダー・人種』

（彩流社，2009 年，2,800 円）

本書のタイトルには，6 つのキーワードが並ぶ。愛国心，アイデンティティ，自由の国，記憶，ジェンダー，そして人種である。いずれも，アメリカ研究において頻出する用語であると同時に，それらの概念自体が，近年では批判的検討の対象になっているものもある。その意味で，本書の射程は広く，個別の論考への関心を超えて興味を持たれる人も多いであろう。

以下においては，8 本の独立した論文から成る本書の構成と概要を簡単に紹介してみたい。第一部「アメリカ人アイデンティティの形成と記憶の構築」は，「アメリカ人」のプロトタイプとされてきたベンジャミン・フランクリンの複雑で流動的な「国民意識」を歴史化した金井光太朗論文，独立革命の歴史を描いて三巻の大部にまとめた（1805 年刊行）女性の歴史家マーシー・ウォレンと，彼女の愛国的共和主義を論じた肥後本芳男論文，そして，1840 年代のアイルランド飢饉とその記憶が，アメリカ合衆国において，亡命してきた民族主義活動家とディアスポラの民（アイルランド移民たち）によって，いかに形成され，いかなる役割を果たしたかを描写した山田史郎論文から成る。

第二部「20 世紀アメリカの国家と個人の拡大」は，南部ノースカロライナ州における離婚訴訟の記録を検証し，19 世紀から 20 世紀前半の結婚観・家族間の変化を論じた佐々木孝弘論文から始まる。次に，中野博文論文は，歴史家ヘンリー・アダムズに焦点を当て，真理や進歩といった近代に特有の思想を否定すると同時に，それを体現していたかのような 20 世紀初頭のアメリカ社会に警告を発した彼の歴史観を探る。安田こずえ論文は，1920 年代に紙巻きタバコが男性性の象徴へと変化したことを背景に，同時に顕在化した女性の喫煙について，それ自体は社会的に認知されていくとともに，女性の喫煙作法が地域共同体の秩序に沿うように定められてゆく過程を，タバコに関する雑誌広告の分析を通して描いている。

最後に第三部「人種的境界に挑戦する国民意識」は，1968 年メキシコ・オリンピックの表彰台における，いわゆる「ブラック・パワー・サリュート」について，これを，黒人アスリートの「エンパワーメント」の象徴と分析する小澤英二論文と，1986 年にニューヨーク市で起きた「ハワード・ビーチ事件」について，この人種主義的暴力への抗議や事件の記憶の形成を通して，集団内部の多様性を充分に含意したうえでの「黒人」の連帯の可能性を提示する村田勝幸論文から成る。

以上のように，本書の各論考は，対象となる時代及びテーマにおいて多岐にわたる。その一方で，編者が「あとがき」で述懐しているように，このような論文集を有機的にまとめることは，様々な理由があって難しいことも事実である。しかし評者にとって，たとえば「愛国心」が本書に通底するテーマであるのか，少しく疑問を抱いたものの，個別論考の充実した内容から得るものは大きかった。

中條　献（桜美林大学）

松田　武 著

『地球人として誇れる日本をめざして――日米関係からの洞察と提言』

（大阪大学出版会，2010 年，1,890 円）

前著『戦後日本におけるアメリカのソフト・パワー』（2008 年）の姉妹編として，安保改定 50 周年という節目に刊行された本書は，「信念の行為として著わす」というビアードのテーゼを座右の銘とする米国研究者による，未来志向型の提言である。本書は二部構成となっており，第一部で米国及び米国外交論が展開され，第二部で国家としての日本のあり方を論じている。

第一部で「世界のヘゲモニー国家」たる米国を構造的に分析した著者は，「基地租借帝国」と「借金漬け」こそが，アメリカ史の現段階であると説く。日本は米国に基地を提供し，さらに「思いやり予算」まで支払っているが，そもそも米国の安保条約締結の目的は，太平洋戦争によって日本との間に生じた力関係の変更を半ば永久的なものとすることにあった。そのような米国の動機には「パールハーバー症候群」があるが，日米の非対称性は日本国内に反米感情を生みやすい。そこで，日米の友好関係を維持するために，政府や民間による文化交流という，ソフト・パワーが用いられたのである。

第二部で著者は，開国から現在までの期間を，日本が精神面で自立し，自主的に世界貢献ができる実力を身に付けるための不断の学習過程ととらえる。著者は「高次の道義的現実主義」の必要性を提唱するが，それは日本国民が憲法前文の平和主義の精神を発揮し，「国単位の良心的兵役拒否者」として，非軍事・民生支援の分野に徹する国際貢献を行うことを意味する。その過程で，日本はどの国からも「日本を攻撃しようという気持が起きない国」へと様変わりするという。

このような「自立と共生」のグランド・デザインを実行するために，著者は若者を中心とする地球民生支援部隊「世界平和をめざす YJCC」（Young Japan's Civilian Corps for World Peace）の創設を提案する。東アジアにおいて日本の存在感が薄れつつある今日，この部隊は日本国民の生き方を国際社会に印象づけ，間接的には，世界各地で露骨に資源外交を展開する中国と，日本のソフト・パワー外交の違いを際立たせるのである。

著者は，米国に国の安全を委ねた代償として，日本人は安全保障に伴う必要悪としての死や暴力などに目をつむる「ダチョウ症候群」に陥っている，と指摘しているが，その是正策として，核保有も含めた「普通の国」ではなく，「グローバル・シビリアン・パワー」を構想するところに，本書の特徴がある。ただし，「世界平和をめざす YJCC」への参加を，志願制からゆくゆくは義務に基づく制度へ切り替えるとする提案は，ある種の「徴兵制」の復活として賛否は分かれるであろう。

ところで著者は，「真の友好と相互理解に基づく新しい日米条約の締結」を提唱しておられ，評者は大変興味をそそられるが，その内容について詳述はされていない。60 年安保改定以来，半世紀ぶりとなる「安保再改定」について，著者の思い描く具体像をおうかがいいしたいものである。

池田慎太郎（広島市立大学）

野口啓子・山口ヨシ子 編著
『アメリカ文学にみる女性改革者たち』

（彩流社，2010 年，2,800 円）

本書は『アメリカ文学にみる女性と仕事』（2006）と同じ編者による秀逸な研究書である。全体は 2 部に分けられ，第 1 部は「白人/男性社会への異議申し立て――人種・ジェンダー・国家」，第 2 部は「女性の自立とネットワーク化――結婚・職業・連帯」となっている。

第 1 部は，L・M・チャイルドの『ホボモック』論で始まり，C・M・セジウィックの『ホープ・レズリー』論，M・フラーの『湖の夏，1843 年』論が続く。いずれも先住民と向き合うことで，女性の視点によるアメリカ史の書き換えが試みられているという議論である。次いで，H・B・ストーの『牧師の求婚』論，H・ウィルソンの『うちの黒んぼ』論，S・トルースの『ソジャナー・トルースの物語』論，F・E・W・ハーパーの『アイオーラ・ルロイ』論では，白人の家庭婦人と奴隷制度の関連性や黒人女性の自立の問題が提起される。

第 2 部は，まさに「闘うヒロイン」であるF・ファーンの『ルース・ホール』論で始まり，大人たちの偽善に反発し，性的欲望に正直なアンチヒロイン像を論じるE・ストッダードの『モーガソン家の人々』論，結婚を夫の母親の「介護」の点から読み解くM・フリーマンの『ニューイングランドの尼僧』論，大人を「改革」する力を持つ子供たちが描かれたK・ショパンの作品論が続く。J・アダムズの『ハルハウスの 20 年』論では，まずは「自分に適した職業を自ら作りだす」必要があったというこの時代の大卒女性の苦悩も伝わってくる。A・イージアスカの『パンを与える人』論では，ユダヤ系移民の女性が厳格な父権制のもとで「自律」を目指す過程が論じられ，C・P・ギルマンの『ハーランド』と『彼女とともに我らの世界へ』論では，「ハーランド」が「個性を許さない画一化された社会」と批判されていて，移民国家アメリカが孕む問題の複雑さを感じさせる。

いずれの章も作家の人生や作品，時代背景が丁寧に論じられ，19 世紀から 20 世紀初頭にかけてのアメリカの改革精神についても，「はしがき」で簡潔ながら明瞭な説明がなされている。また，「市民としての権利を阻まれている女性の自我の探求が必然的に社会改革の問題に帰結」し，「書き記すこと自体が，自己表現の手段であり，社会への働きかけを意味する」という論点も明確で，当時の女性にとってペン（トルースにとっては「口承伝説」）が唯一の改革の手段だったことがよくわかる。

しかし，編者自らも認めているが，その挑発的な題名とは裏腹に，本書では女性の「意識改革」に重点をおく家庭小説論的要素が目立ち，実際の社会改革運動との関連性がやや希薄に感じられる。「フラー，カミンズ，ファーン，ストー，ギルマン，ショパンが外れたことが『女性と仕事』の弱点」と感じた編者が本書に託した思いもわかるが，あえて「女性改革者」と銘打つなら，M・G・ニコルズ，A・ブルーマー，H・H・ジャクソン，V・ウッドハル，E・ゴールドマン，M・サンガーらの名も欲しい。「あとがき」に「断念せざるを得なかった作家にも思いは残る」とあるのはさらなる続編の予告だろう。期待して待つことにしたい。

福田敬子（青山学院大学）

福岡和子・高野泰志 編著
『悪夢への変貌――作家たちの見たアメリカ』

（松籟社，2010 年，2,520 円）

アメリカの自由と平等という国家的理念は，その美しさとは裏腹に，人種差別，経済格差，帝国主義といった現実との生々しい衝突を繰り返してきた。そうした衝突は，国家の矛盾や不正義を鋭く見抜き，個人の苦悩や葛藤を深く思考する文学者の宿命的なテーマであり，かつてリチャード・チェイスがアメリカ小説を創りだす想像力の源泉に「文化の統一性や調和」ではなくその「矛盾」を探ったように，米文学の最大の潮流は，アメリカン・ドリームの称揚と崩壊，まさに「夢」が「悪夢」に変貌する過程の描出にあった。福岡和子が指摘するように，作家は「勇気を持ってアメリカの裏面を暴き，国民に直視するように促してきた」のであり，畢竟，アメリカ小説の多くは，社会や文化に対する抗議やそれらの改革を目論んできたのだ。

本書は，米国史上初の黒人大統領誕生の年にあわせて，文学を通してアメリカという国家の再考を企図したアンソロジーである。一章から三章（丹羽隆昭・中西佳世子・福岡）で 19 世紀の代表的な作家ホーソーンとメルヴィルを論じ，四章（竹井智子）でジェイムズから 20 世紀に入り，五章（杉森雅美）でハーレム・ルネッサンス期の新しいニグロ像を検証し，六章から八章（山内玲・島貫香代子・高野泰志）でフォークナーとヘミングウェイという巨大な小説家を再読し，それ以後の現代作家ホークス，バース，パワーズに九章（吉田恭子）と最終章（伊藤聡子）で論及する。どの章も作品の深みに届く秀逸な批評であるが，紙面の関係上，数篇を紹介するにとどめる。

丹羽のホーソーン論は，ユートピアな家族の描写が家庭の不在というディストピアな原風景を映し出す逆説を浮き彫りにする。福岡のメルヴィル論は，貧困のテーマを 19 世紀前半の資本主義的市場経済への移行に伴う社会格差の文脈で捉え，貧者たちの多様な声に社会への抗議と存在認識の切望を読み込む。メディアを通じたリンチ表象の全国的拡大に着目する山内は，フォークナーの『八月の光』におけるリンチ場面を南部を越境する国家の記憶として読み解く。また高野は，カトリックに改宗したヘミングウェイの信仰の変遷を精査し，「最後のすばらしい場所」を原罪/実父が支配するピューリタニズムの反救済を描いた短篇として位置づける。さらに吉田は，ホークスによる実験的作文授業とバースによる自作朗読授業を考察し，創作教育の理想に潜む白い声に調律される反動性に切り込んでいる。

こうした論考から浮かび上がるのは，「夢」と現実の裂け目から生起する個人の不気味な呻きと文明の不穏な軋みを言語化する文学の強靭な営みである。女性作家や人種的/性的少数派作家は，アメリカに内在する「悪夢」の複層性を明示するとともに，男性/白人/異性愛者の「悪夢」への嘆きも相対化する。しかし総じて，理想と現実のあわいに身を投じ，社会や文化と対峙・格闘する文学者の生の痕跡が，米国の過去と現在を照射し，その混迷と希求を刻印し続けることは間違いない。

竹内理矢（立教大学・講）

依藤道夫 編
小倉いずみ・古屋　功・依藤朝子・瀧口美佳・花田　愛 著
『アメリカ文学と戦争』

（成美堂，2009 年，3,300 円）

現在，アメリカ文学研究では「戦間期」や「冷戦」といった枠組みで「戦争文学」を読み直す動きが盛んである。そのような中で出された本書は，アメリカ文学全般における戦争表象を包括的に論じており，大変時宜を得ている。本書の最大の特色は，初学者にも十分に配慮された章立てにある。時代順に配置された全 12 章のうち，奇数章では，植民地時代から 20 世紀後半までの時代毎に起きた主な戦争に関する歴史的・文学的背景が概論的に語られ，偶数章では，各々の時代を代表する 1，2 作を通して戦争の文学的表象が具体的に分析される。概論と各論が交互に並んだ本書は，一冊でアメリカ戦争史と文学史と作品解釈の三つを学べる親切設計なのだ。

以下，各論にあたる偶数章の内容を紹介する。まず，小倉いずみ氏による第 2 章では，アンダーヒルの『アメリカからのニュース』でのピーコット戦争の記述が論じられており，ネイティヴ・アメリカンと入植者の対立だけでなく，イギリスとオランダという植民勢力の拮抗の様子が明らかにされる。白人とネイティヴ・アメリカンの対立の構図は，瀧口美佳氏による第 4 章でも取り上げられるが，ここではクーパーの『モヒカン族の最後』を中心に扱うことによって，入植者/先住民の線引きの難しさが示される。南北戦争を担当する依藤道夫氏による第 6 章では，フォークナーの『アブサロム，アブサロム！』の各セクションにおける南北戦争の言及の回数が一覧表にされ，「敗戦」という状況が何を意味するかが問われる。花田愛氏による第 8 章では，第一次世界大戦を題材としたドス・パソスの小説群に注目し，そこで描かれる下級兵士たちが，ヒーローにもアンチ・ヒーローにもなりきれないという中途半端な立場により，現代にもあてはまるポストモダン的人物像であることが指摘される。古屋功氏による第 10 章では，太平洋戦争に兵士として日本軍と戦ったことのあるノーマン・メイラーが，自身と日本との深い関わりを通して代表作『裸者と死者』を執筆するに至った経緯，および作品内に示される自然との共生のあり方が論じられる。依藤朝子氏による第 12 章では，トーランドの手記における朝鮮戦争およびオブライエンの『カチアートを追跡して』におけるベトナム戦争の表象が取り上げられる。前者は小説的語りを織り交ぜて朝鮮戦争を活写したノンフィクションであるのに対し，後者はマジカル・リアリズム的手法を通してベトナム戦争での兵士たちの苦悩を幻想的に描出していることが指摘される。

本書では，執筆者全員が，勝者と敗者の境界線の曖昧さを示唆しており，いずれも説得力に満ちた論考となっている。あえて気になる点を言えば，アジア系やアフリカ系といった非白人系作家たちによる戦争表象が触れられていないことだろうか。とはいえ，ここまで丁寧にアメリカ文学と戦争の全体像を教えてくれる邦語文献はめったにない。今後このトピックでアメリカ文学を論じようとする際にはつねに手元に置いておきたい本だ。

小林久美子（日本学術振興会特別研究員）

有賀夏紀・小桧山ルイ 編著
『アメリカ・ジェンダー史研究入門』

（青木書店，2010 年，3,675 円）

本書は，1990 年代以降，日本で成果が蓄積されてきたアメリカ女性史における個別の研究を相互に関連させ，アメリカ女性史の全体像として提示することを目的として編まれている。本書の執筆者は社会史の視点から，1970 年代以降アメリカの女性史研究の主流となり，後に批判の対象にもなった「女性の領域（白人中産階級の女性を対象にした歴史研究の中から生まれた，家庭を中心とする女性の生活の場を指し示す概念）」論に収まらない女性の歴史を記述した。本書が全体で示唆するのは，女性という集団内部の多様な歴史的経験を，人種・民族，階級，性的志向などの差異が入り組んだより広範な支配関係の中に位置づけるという新しい視点である。

例えば，第一次世界大戦時に中産階級の白人女性活動家が「健全」な白人兵専用娯楽施設を設置して軍需産業に従事する若い女性労働者の性道徳をコントロールし，一方で黒人女性活動家は逸脱的セクシャリティという偏見からの保護を目的として黒人兵と黒人女性労働者に対し慰安施設を提供した。両者の愛国的な戦争協力活動は，実は相容れない動機に因っていただけでなく，人種隔離によって白人兵と黒人兵の利用が規定されていた兵士用慰安施設のカラーラインをさらに強化した。（第 9 章）

また，女性の雇用が急速に拡大した第二次世界大戦時に「リヴェット工ロージー」と総称された女性労働者の仕事は，人種によって職種が細分化されていただけでなく，女性労働者のセクシャリティを危険視し，異性の異人種間接触を恐れる経営者や監督者によって男女の仕事が分離，差異化され，序列化が図られていた。銃後に留まる男性労働者の男性性の強調と維持を重視する造船所内のジェンダー秩序の再編成は，女性労働者の仕事の人種別細分化や序列化と密接に関連しながら進行した。（第 11 章）このように，女性史研究に新しい切り口を開いたジェンダー史研究は集団内の個々の関係性を明らかにし，それらを包括的に提示するだけでなく，ジェンダー秩序を基礎とするアメリカ多文化主義社会の生成を歴史的に検証することを可能にした。

13 の章と 9 つのコラムで構成された本書の特徴は，各章では執筆者の得意分野でなされた濃密な研究調査に基づく議論が展開され，コラムでは時代背景を理解する上で重要なトピックが丁寧に説明されている点にある。それぞれに今後の研究課題や展望が示されているため，読者は研究テーマを探す際のヒントを得ることができる。また，（アメリカ・ジェンダー史の起源はいつかという疑問はあるにしても）巻末に付けられた 1400 年 B.C.から 2009 年に亘る年表は有益である。

ジェンダー史を通してアメリカの歴史を読み解く日本のアメリカ・ジェンダー史研究は本書によって緒に就いた。男性を含む 22 名の執筆者が本書で示したように，アメリカ史研究の新しい方向性は確実に研究者間の新たなネットワークを推進させ，時代のうねりとなる。

安田こずえ（東京大学・院）

2010年度アメリカ学会年次大会分科会報告

於：大阪大学

日米関係分科会

2010年度の「日米関係」分科会では，北九州市立大学の小尾美千代氏（非会員）をおまねきし，「日米自動車摩擦をめぐる政治的調整の変容―政府間協議における貿易政策アイディアと自動車産業のグローバル化の観点から―」と題する報告をしていただいた。同報告は，1980年代から90年代にかけての日米自動車摩擦の経緯を実証的に検証することにくわえ，コンストラクティビズムという分析視角をもちいて，日米両政府間での政治的調整のプロセスと市場の変化（自動車産業の構造変化とグローバル化）の相互関係に着目したものであった。とりわけ，前者の政治的調整に関しては，「政策アイディア」という概念を中心に，自由貿易主義，公正貿易，日本異質論，戦略的貿易政策など，この当時話題となった概念の整理がなされた。

討論者の平田雅己会員（名古屋市立大学）からは，こうした枠組みが現在の日米関係においてもいまなお有益な視点であるとの指摘がなされた。また，会場の参加者からは，日米両国の立法部，行政部，利益集団の動向に関する質問などがよせられた。

今回の分科会は，残念ながら，参加人数こそ少なかったものの，その分，専門的見地からのきわめて中身のこい議論が展開されたといえよう。

（浅野一弘）

アジア系アメリカ人研究分科会発表報告要旨

2009年10月10日，カリフォルニア大学バークレー校学会（「日本と日系アメリカ：環太平洋のつながり」）での発表者3人が，その概略を報告した。

1）「移民地川柳と日本」 粂井輝子（白百合女子大学）

日本の川柳きやり社とシアトルおよびロサンゼルスの川柳吟社の交流について報告し，日本にも移民地川柳等の短詩資料があると指摘した。現在アメリカの日系日本語文芸のかかえる問題点，作者の高齢化，発表の場の消滅，保存の場（同人拠点）の消滅と研究者の視点から問題提起した。

2）「在米天理教布教史戦時抑留のトランスナショナルな文脈」　山倉明弘（天理大学）

天理教は戦前，北米・南米や東アジア・満洲へ信者を送り，顕著で活発な活動を行った。特に，アメリカや満洲では，その人数に不釣り合いなほど目立つ存在だった。本報告では，日米戦争中の在米天理教布教師の戦時抑留，およびその北米監督だった人物の異様に長い期間におよんだ抑留の原因を，満洲，日本，米国というトランスナショナルな文脈で論じた。

3）「強制収容とアイデンティティ・シフト」野崎京子（京都産業大学（名））

公文書館資料によって明らかになった発表者一家の強制収容の実体とオーラル・ヒストリーによる研究方法について私見を述べた。その過程を通して体感したアイデンティティの多面性と流動性に言及した。また近年，南米日系人の強制収容とリドレス問題も注目されているが，「日系人」を広義（グローバル）に解釈し，トランスナショナルな視点を自覚したい。

（野崎京子）

冷戦史研究分科会

吹戸真実会員が，「国共内戦の帰趨が明確化し台湾の処置が検討課題として浮上する1948年末から，米華相互防衛条約（MDT）の成立する54年末の6年間の冷戦初期における中台分断状況の定着過程について報告した。その中でダレス国務長官の中台政策をめぐる新思考が，54年後半，米国が中台分断の選択へと転じてゆく上で決定的な意味をもった事実が明らかにされた。さらに，同年9月初頭の第一次台湾海峡危機の勃発をうけ，ダレス主導による中台政策の軌道修正が本格化した結果，最終的に米国は同年末，対中政策に関して長期的な「封じ込め」を選択する一方，主にMDTを通じて蒋介石を台湾に固定化することにより，中台分断状況を安定的なシステムとして成立させたと論じた。それに対し参加者の間から，四方俊祐会員が本報告は分析が軍事戦略に，米国政府内の分析に偏り過ぎていないか，台湾側の対応も考慮すべきでないか，土屋由香会員が軍事政策と文化政策との関連について，横井利直会員がMDTの果たした役割の意味について，松田春香会員が東アジアにNATOのような組織がなぜ実現しなかったのかといった重要な指摘と質問があり，有益で活発な意見の交換が行われた。

（松田武）

アメリカ政治分科会

本年度のアメリカ政治分科会は「アメリカ政治の地殻変動2」と題して，二つの報告をたてた。向井洋子会員の「ニクソンの議会対策」と，鈴木健人会員の「オバマと核軍縮」である。向井会員は，帝王的大統領と批判されたニクソンが，政権第一期において議会指導部との会合に時間をかけ，外交においては超党派の，内政においては共和党指導部との連携を密にしたことを明らかにした。鈴木会員は，ブッシュ外交から決別したかに見えるオバマが，核戦略やミサイル防衛の上ではブッシュ路線を継続していることを示し，アメリカ一極支配の維持を目指す点で，オバマもこれまでの大統領と大きく異ならないと論じた。討論では，向井報告に対して他の政権との比較の重要性や秘密主義外交の問題，鈴木報告に対して消極的安全保障の多様さやアメリカ一極支配とは何かが質問された。ニクソンとオバマと対照的に見える二人の政治指導に共通性があることが発見された点で，興味深いセッションであった。

（中野博文）

アメリカ先住民研究分科会

アメリカ先住民研究分科会では多数の出席者の下，川浦佐知子氏（南山大学）による「自己・語り・歴史――ノーザン・シャイアンに見る集合的記憶の在り様」と，野口久美子氏（立教大学・講）による「北米ネイティブ・アメリカン史研究における理論の変遷と可能性」という2つの報告が行われた。

先ず川浦氏によって，主に心理学の立場から行われた現地調査を元に，特定の先住民集団（部族）内の各「個人」の記憶（ナラティブ）と「共同体」の記憶（ミュージアム展示）が，「国家」の記憶（歴史）との関わりの中でどのように集合的記憶として維持・継承されているのかについて報告がなされた。野口氏の報告では歴史学の立場から，1970年代を画期に新たな潮流を迎えた合衆国におけるアメリカ先住民史研究の現在に至るまでの変遷が，アカデミック内外の先住民を巡る状況が研究の性質にもたらした影響と，研究の今後の方向性への展望と共に紹介された。

今回の2報告はいずれも，合衆国における最新の状況についての知見を得ることができる点において，またアメリカ先住民研究への多様な視角からのアプローチという点において本分科会の趣旨にも沿った，啓発的な報告であった。

（岩﨑佳孝）

経済・経済史分科会

経済・経済史分科会では，浅羽良昌会員（神戸夙川学院大学）に，近年のサービス経済化との関連で注目される「アメリカ経済と観光産業」をテーマに，ご報告いただいた。報告では，最近のアメリカの観光産業の特徴が，経済規模，国内の雇用状況，付加価値比率，労働生産性などの視点から紹介された。また，世界旅行観光協議会やアメリカ商務省発行の資料などをもとに，世界各国の観光市場の動向や観光の輸出・輸入額が比較検討され，アメリカ観光産業の推移と世界における位置付けについて論じられた。アメリカは世界最大の観光経済の規模を有しているにもかかわらず，観光産業は独立した産業とは言えず，全体像の把握が容易ではない。しかし観光産業は，アメリカにとって外貨を稼ぐ貴重な収入源であり，観光先進国であるヨーロッパ諸国や，発展途上のアジア各国に比べると，確固たる地位を築いていることが明らかにされた。経済研究者に限らず，観光業に関心のある大学院生なども含めた幅広い参加者から，産業連関の資料の「観光」という切り口からの分析手法，長期的なドル安の観光への影響，黒字を続ける教育収支との関係などについて質問が出され，活発な議論が行われた。

（柳生智子）

文化・芸術史分科会報告

今回の分科会では「アート概念の変容」というテーマの下，3人の若手研究者に発表を行ってもらった。荒木慎也（東京大学）は，1933年にボストン美術館から東京美術学校へ寄贈された石膏像について社会的・歴史的調査を行い，日米それぞれの美術史的文脈の中で石膏像が担っていた意味と役割を明らかにし，その上で「複製」に対する日米での異なる感受性について興味深い示唆を行った。小森真樹（東京大学・院）は，芸術享受のスタイルの変化とそれに伴う用語の言い換えという観点から戦後日本美術の歴史を再考し，その結果として従来までとは根本的に異なる「消費」という芸術享受のスタイルが生まれ，それがアメリカ消費文化と関連付けられながらサブカルチャー化していった経緯を明らかにした。宮下忠也（同志社大学・院）は，日米双方の村上隆批評を比較し，日本とアメリカの美術界における村上作品の受容の差異と共通点を明らかにし，日米間で起こっている芸術の分野での文化的接触について興味深い考察を行った。報告後の質疑応答も刺激的で大変充実したものとなり，参加者からも本分科会の発展が期待された。今後は継続的に分科会を開催し，アメリカ学会における文化・芸術分野の拡充に寄与したいと考える。

（小林　剛）

アメリカ女性史・ジェンダー分科会

昨年度に引き続き，本分科会では研究発表（一名）を中心に議論を行う形をとった。本年度は，木村（横塚）裕子氏（カリフォルニア大学バークレー校（院））が，「革新主義時代の米国における貧困母子救済をめぐる議論の進展」と題する報告を行った。木村（横塚）氏の報告では，まず19世紀における貧困母子救済に関する理念と，20世紀初頭に整備された母子家庭の法的支援制度の理念の相違が取り上げられ，この両者の違いに関する背景の説明がなされた。さらに木村（横塚）氏は，革新主義時代の貧困の原因と責任の所在をめぐる議論と，日本における児童保護政策改革者による公的母子扶助の導入に関する議論とを対比し，そこから米国におけるニューディール期以前の母子福祉政策のイデオロギー的特徴の照射を試みた。この木村（横塚）氏の報告を受け行われた質疑応答では，用語の和訳に関する指摘，日本の公的母子扶助と米国の母子福祉政策との比較に関する問題点の指摘，また資料に関する助言などがなされ，短い時間ではあったが活発な議論が行われた。

（佐々木一恵）

初期アメリカ分科会

本分科会では，植民地時代史と近世イギリス帝国史の有機的結合をめざし，森丈夫氏（福岡大学）に報告「帝国・戦争・北米植民地」をいただいた。森氏は本国・植民地間のつながりを前提としつつ植民地の個性に注目し，17世紀末・18世紀初頭の対仏防衛の態勢をめぐる北米各植民地と本国商務院の見解を，史料に基づき紹介した。1690年代，各植民地はバラバラに，自分こそフランスとの対峙上肝心でかつ防衛が困難であると主張して支援を求めたが，商務院は，北米は豊かなので本国が防衛を支援する必要はないという立場をとった。だがアン女王戦争期になると，植民地側は「イギリス帝国」という言葉を用いて自らをそこに位置づけ，北米・カリブ海の「豊かさ」と防衛を結びつけて本国の援助を求めるようになり，また商務院の見解もこの方向に変わり始める。植民地防衛をめぐって帝国観が七年戦争前後でなく，18世紀初頭に深化したとする斬新な報告をうけて，出席者からは「帝国」という言葉の17・18世紀的意味合い，植民地間の駆け引きの側面をどの程度重視して資料を解釈するか，などの質問が出され，実証研究の醍醐味と植民地時代研究がいかに広がりうるかを実感できる分科会となった。

（橋川健竜）

第 45 回韓国アメリカ学会主催国際セミナーに参加して

今年の韓国アメリカ学会（ASAK）主催国際セミナー（同学会年次大会）は，2010 年 10 月 22・23 日の両日，韓国東北部の景勝地・雪岳山国立公園を背後にもつ江原道束草市で開催された。会場は，西に雪岳山公園を遠望できるばかりか，東には East Sea（東海，日本海の韓国呼称）を眼前にみるという豪華なホテルであった。総合テーマを“America as Myth, America as Reality”とし，2 日間で 10 部会（session）がもたれた。①Remembering War, Rethinking War，②Projections of American Life，③Democracy, Ethics, Identity（Graduate Students），④Reading the Transnational，⑤Subjectivity and Counter-Discourse，⑥Race and the Challenge of Plurality，⑦US Policies and the Global Order，⑧Visualizing and Revisioning America，⑨The Politics of American Culture，⑩American Dream, American Frontier，であった。それぞれ 3〜4 名の報告（20 分程度）と，おのおのに対しコメンテーターが用意した数分のコメントがあり，その後フロアーとの自由意見交換をおこなう構成であった。事前にすべての報告ドラフト（内容のほぼ全文）が配布されていること，また運営のすべてが，英語・英文でおこなわれる点が特徴でもあった。わたしは 4 部会を聞いたが，いずれも充実した報告であり，またコメンテーターの指摘も，ペーパーを事前に十分吟味したうえでの的確な議論・批判が多かった。フロアーからの質問は時間的関係から多くはなかったが，間違いなく水準の高い研究会議であった。

この年次大会を国際会議と銘打つ理由は，報告者を，韓国アメリカ学会にかぎることなく世界的に募っていることであろう。今年もアメリカ，中国，日本，ドイツ，デンマークからの報告者が，各部会において韓国人報告者と全く同様の扱いで加わっていた。徹底した国際会議のスタイルを追求する趣旨であろう。日本からは，私のほか松田春香会員が招待で参加し，松田さんは部会①で報告をおこなった。同部会には応募で臺丸谷美幸さん（お茶の水大学大学院後期博士課程）も，加わった。お二人の報告は朝鮮戦争にかかわるものであり，その後の質疑をみてもこのテーマに関する韓国人研究者の関心の高さがうかがわれた。朝鮮戦争は日本人にとっても重いテーマであり，今後，このテーマに関わり日韓のアメリカ研究者が，朝鮮近代史・日本近代史研究者とともに共同研究する機会が求められて良いと感じた。最後に私事だが，会議で多くの方々の歓迎を受けた。日韓学術交流の重要性を感じるとともに，関係の方々に記して感謝を申し上げる。

（会長・紀平英作）

第 45 回韓国アメリカ学会主催国際セミナー参加記

2010 年 10 月 22，23 日，紀平英作・現会長と共に，韓国アメリカ学会（ASAK）主催セミナーに日本アメリカ学会（JAAS）の代表として参加する機会を頂いた。今回のセミナーは，東海〔日本海〕，雪岳山に囲まれ，韓国有数の風光明媚な地である江原道束草で開催された。共通テーマは“America as Myth, America as Reality”であり，歴史・経済・社会・文化・文学等，多岐にわたる質の高い研究報告が行われ，活発な議論が繰り広げられた。例えば，“America as Myth”のテーマとしては，現代ルーマニアにおける米国認識やアジア系移民の「アメリカン・ドリーム」があり，“America as Reality”のテーマとしては，米国の金融危機や人種間の葛藤，朝鮮半島における米国のプレゼンス（筆者の報告もこれに該当）があった。ASAK の現状は，現在の韓国社会や韓米関係を反映しており，大変興味深かった。1997 年のアジア経済危機後，特に韓国社会は急速にグローバル化へ対応してきたが，ASAK も国際化の様相を呈している。第 1 回セミナーより使用言語を英語としてきたが，米国留学経験者が多数を占める韓国人研究者は勿論，韓国の大学に所属する欧米系の教員や CFP へ応募参加してきた米国，ルーマニア，デンマーク，マカオなどからの研究者の報告もあり，グローバルな学術交流を積極的に行っている。また，JAAS に比べ，文学・文化への関心が強いが，これは韓国社会における米国像を表している。第二次世界大戦後，北緯 38 度線以南に進駐した米国は，韓国樹立（1948 年）以降，切っても切り離せない存在である。朝鮮戦争（1950–53 年）を経て分断が固定化した後，韓国社会において米国政治・社会を批判的に論ずることは，「容共」を見なされた。幅広い「アメリカ研究」が可能になったのは，1980 年代後半の民主化運動以後に過ぎない。とはいえ，世界的に躍進を続ける韓国企業同様，高水準と多様性を持つ ASAK から大きな刺激を受けた。今回貴重な機会を与えられたことに感謝したい。

（松田春香）

前号訂正

①所属の訂正
小宮山真美子　（誤）国立長野工業高等学校　→　（正）国立長野高等専門学校
②お名前の訂正　（誤）佐原綾子　→　（正）佐原彩子

編　集　後　記

アメリカ中間選挙直前，オバマ大統領がツイッターにあげたつぶやきは「どこで投票するかわかっていますか」というメッセージだった。その後のつぶやきには「『投票した』とフェイスブックに書き込もう」というものも。携帯電話やスマートフォンで気軽にアクセスできるツイッターや SNS が投票を呼びかける有効な手段になったということだろう。

だが，その手軽さはまた，簡単に情報が流れ去ってしまうことでもある。めまぐるしく流れる情報に惑わされずに向き合う姿勢もまた，必要であることを心に刻みたい。

（H. O.）

2010 年 11 月 30 日　発行
アメリカ学会
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科附属
アメリカ太平洋地域研究センター気付
Tel & Fax（03）5454-6163
http://www.jaas.gr.jp
発行人　紀平英作
編集人　中條　献
印刷所　啓文堂松本印刷
〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12